

令和元年6月16日現在

機関番号：32402
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2018
 課題番号：16K02324
 研究課題名(和文)戦後ドイツにおける「作家映画」の系譜

研究課題名(英文)Auteur Cinema in postwar Germany

研究代表者

渋谷 哲也 (Shibutani, Tetsuya)

東京国際大学・国際関係学部・教授

研究者番号：90438789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：戦後ドイツにおいて独自の美学や様式を生み出した映画監督たちについて、国籍、時代、ジャンル、テーマの境界を越えて作品分析を行い、戦後ドイツという特殊な社会的かつ歴史的コンテキストの中で特徴を考察した。主にニュージャーマンシネマのファスビンダー、ストロブ＝ユイレ、クルーゲ、ネストラー、「新ベルリン派」のシャーネレクを中心に挙げた。主に日本未公開作を中心とした映画上映、作品解説のレクチャー、観客との討論という形でイベントを行い、その成果の一部は論文等の文章として公表した。他の成果は今後文章化する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本ではまだまだ知られていないドイツ映画の重要な作品を字幕付きで上映し、その特徴的な美学やドイツ独特の歴史的・社会的背景を解説することは、映画研究の領域のみならず、国際的な文化交流としても重要な意義があったと思われる。とりわけシャーネレク監督のスタイルは現代の作家映画においてもっとも先鋭的な方法論を展開していること、またネストラー監督の社会的ドキュメンタリーは、ワイズマンやランズマンといった類似テーマを扱う監督たちとも異なる極めてユニークな折衷的な芸術的スタイルを特徴としている。こうした作家たちの探求が映画に対する新たな視野を与えてくれるはずである。

研究成果の概要(英文)：My research focus is on the directors in post-war Germany who are part of the author's cinema and have special aesthetic and socio-critical tendencies. It is crucial to treat these directors, because their particular film style is characterized by the dappling social and historical contexts. Above all, Fassbinder, Straub-Huillet, Kluge and Peter Nestler from the new German film, and Angela Schanelec and directors from the "New Berlin School". My activities consisted in showing the previously barely known films with Japanese subtleties, in presenting them to the films, and then debating them with the audience and the scientists of different disciplines. The results of the film events are then partly published in writing, which will then follow more texts in the coming years.

研究分野：ドイツ映画

キーワード：ドイツ 映画史 作家映画 ドキュメンタリー ニューシネマ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本においてドイツ映画研究は未だ確立しているとはいえない。そうした状況の中でも作家性の際立つアート系映画が日本に紹介される機会は多かった。1960 - 70 年代に西ドイツで興隆した「ニュージャーマンシネマ」は日本でも知られているが、現在欧米の映画研究の概観するならば、時代や国籍、またハイカルチャーとマスカルチャーの境界に囚われず、他の芸術やメディアとも関連させた映画研究が進んでいる。そこでドイツ映画研究も個別の映画事例の紹介ではなく、体系的な考察が必要とされている。

前年度までの私の科研費研究課題において、主にニュージャーマンシネマの代表的な映画監督については幅広いコンテクスト性の中での再検証をテーマにしてきたが、今回新しい研究を始めるにあたりニュージャーマンシネマの中でも日本に殆ど紹介されなかった重要な作家を取り上げると共に、21 世紀の新たな作家映画「新ベルリン派」を考察することにした。ドイツ語圏という領域だけでも極めて多様な映画文化が展開し、それを概観するためには旧来の映画史記述の枠組みを越える必要がある。なぜなら映画は芸術であると同時に娯楽であり、いまだ影響力の大きい社会的メディアでもある。したがって映画研究は社会や歴史のコンテクストの中で国際的な関連性も視野に入れながら考察せねばならない。アメリカやフランスに学んだ日本の映画研究において作家研究とカルチュラル・スタディーズを結ぶ研究成果は日本でも次第に多くなっているが、ドイツ映画を題材にした研究はいまだ未開拓の状況と言わざるを得ない。

2. 研究の目的

研究テーマをニュージャーマンシネマと現代の新ベルリン派の両方に設定したのは、個別の作家作品研究に留まらず、ドイツ映画史の中で作家性の強い映画が占める位置づけを歴史的に関連付けながら考察しようと試みたからである。近年では 40 年代イタリアのネオレアリズモが 60 年代フランスのヌーヴェル・ヴァーグに影響を与え、それが 10 年後にニュージャーマンシネマをもたらしたという歴史記述は定着しているが、その際これらの新しい映画運動は制度化された商業映画など既存の映画制度への対抗文化であった点が注目される。そこには既存の社会制度への批判だけでなく、新しい映画経験の可能性を拡張することも目論まれていた。その一方映画の黄金時代だった 20 - 40 年代の主流映画において作家性を持った優れたシネアストを発見したのもこうした新しい映画運動である。ニューシネマにおいて商業性と主流文化への憧憬と対抗という葛藤を孕んだ関係は戦後ドイツの映画にも同様に観察される。

ただし映画研究の基本はやはり個別の映画を詳細に分析考察することであり、それらの作品群を点と点で結びながら概観的な考察にたどり着くことだと思われる。したがって本研究ではこれまで注目されなかった重要な映画監督と作品を日本に紹介し、観客と共に考察を重ねてゆくことにある。とりわけナチ時代の映像文化に対する批判精神の強いドイツという文化圏において、他の国の映画には見られない独自の対抗文化が形作られてきたことを具体的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

当該の映画作家や作品についての新旧の批評や研究論文を読み込むだけでなく、日本語字幕を付けた上映を行い、できるだけ多くの観客や映画研究者と共に映画に対峙して意見を交換できる機会を作ることに力を傾けた。そのため研究成果を公表するに際し、むしろ一般観客に開かれた映画上映と講義 + 質疑応答、また監督や評論家を招いての対談やディスカッションを中心に行った。これらの講義や討論の多くは録音保存してある。

こうした上映活動はすでに 2010 年より継続的に行ってきたものだが、その蓄積を学会発表や様々な論文や解説の執筆、そして著書の出版という形で随時発表してゆく。これまでの研究課題について今回の研究期間中にはストローブ = ユイレについての単行本出版というかたちで成果を発表した。

4. 研究成果

本研究において、私がこれまで関わってきたファスピンダー、ストローブ = ユイレといった映画作家についての分析考察を継続しつつ、他の映画作家をも含めて次第に視野を広げていった。例えばニュージャーマンシネマにおいて斬新な映画スタイルを特徴としながら日本では考察される機会の少なかったアレクサンダー・クルーゲ、ルドルフ・トーマ、ペーター・ネストラーといった映画作家たちに取り組みだけでなく、むしろ娯乐的なジャンル映画を追求したためにこれまで無視されてきたローラント・クリックや、同時代の東ドイツ映画において共通する社会的テーマを取り上げて斬新な作風を展開したハイナー・カーロウらにも注目した。また「新ベルリン派」においてはアルスランと並んで新しい時代の作家映画の代表者の一人であるアンゲラ・シャーネレクを日本に紹介することを手始めとして、現代ドイツの映画美学の新しい動向についての知見を広げる上映活動を企画実践した。

2016 年度はファスピンダーを体系的に導入する試みから始めたが、映画上映は春に立誠シネマ（京都）でナチ時代から戦後西ドイツの重要な映画作家として知られるヘルムート・コイト

ナー、またファスビンダーと同世代で、実験映画作家としての特徴の強いヴェルナー・シュレーターと並べて、メロドラマというキーワードで作品を選択して上映した。この比較の意図は戦後のニュージャーマンシネマの代表者であるファスビンダーが、まさにナチ時代を生きた父の世代の映画を参照点とした可能性のあること、それは翻ってナチ時代の映画にも規範を逸脱する美学やクィア性を備えた作品もある（コイトナー）というコンテクストを指摘することである。またアンダーグラウンドの実験精神がメジャーの物語映画に浸透して独自の物語法を生み出すことがファスビンダーとシュレーターの相互影響関係から見出せる。こうした比較は時代やジャンルを越える考察を行う契機として非常に有益なものだった。また同年秋には東京と京都でファスビンダー映画を纏めて上映し、ファスビンダーという映画作家に、大衆性、実験精神、映画と演劇の関係性、社会制度との確執といった様々な切り口が存在することを、作品分析によって掘り下げていった。

2017年度はストローブ=ユイレについての研究成果をまとめることを第一の課題とした。12月から翌3月にかけてアテネフランセ文化センターで行われたストローブ=ユイレ全作品上映に合わせて、日本語で初の論集を単行本として出版し、その著作の中で網羅しきれなかったテーマについて、上映に際して対談ゲストを招いて討論を行った。ゲストは舞台演出家、音楽学者、イタリア文学者、そして現在ストローブ=ユイレの製作や配給を管理するバルバラ・ウルリヒ氏である。学際的な観点でストローブ=ユイレについて議論を展開することができた。

6月の日本ドイツ学会では現代ドイツでの社会挑発的な映画演劇活動を概観するシンポジウムで発表し、70年代のファスビンダー、90年代のシュリンゲンズィーフの挑発的なスタイルを紹介した上で、近年話題となった映画『帰ってきたヒトラー』の意義と問題点を指摘した。その内容はドイツ学会誌である「ドイツ研究」に掲載されている。

また8・9月には東京でファスビンダーと共にクルーゲ、ジーバーベルクの60-70年代の代表作の特集上映も行い、ニュージャーマンシネマにおいて映画という概念を芸術的にも社会的にも広げることに関与した映画作家たちの考察をトークゲストと共に公開討論を行った。

また2018年度最後の3月にはドイツからアンゲラ・シャーネレク監督を招聘し、彼女の代表作5本を字幕付きで上映し、東京・京都で全7回の質疑応答を行った。これにより彼女を含む「新ベルリン派」の多彩な内実がより鮮明に捉えられるようになったと思われる。シャーネレク監督のミニマルに切り詰められた映像と言語を用いた物語映画は観客に研ぎ澄まされた知覚を要請する。家族や友人の葛藤という身近なテーマに古典的な文学性や政治性を織り込み、しかも「映画とは何か」という普遍的な問いを投げかける。「新ベルリン派」というレッテルを越えて現代における作家映画を代表する一人とあってよいシャーネレクを日本に紹介できた意義は大きい。

2018年は、前年度に引き続いて映画上映と講演活動を継続した。4月には東京で「新ベルリン派」の様々な作家をまとめた特集上映を、5月には神戸と京都でストローブ=ユイレの上映、9月には神戸でトーマの上映、10月には京都でクルーゲの上映を行ったが、とりわけクルーゲの特集では、90年代以降劇場映画からテレビの文化番組へと活動場所を写した彼のテレビ番組のアンソロジーを初めて日本語字幕付きで上映した。映画メディアと他のメディアの関連性の考察は、現代の映画研究には避けて通れない課題であるが、ニュージャーマンシネマの主要人物たちが80年代以降テレビやビデオアート、インスタレーションなど、様々なメディアの越境を実践していたことは、彼らの斬新な映画美学を遡及的に考察するうえでも重要な示唆を与えてくれるだろう。

さらに2018年11月には、現在のドキュメンタリー映画監督として世界的に評価されるペーター・ネストラ監督を招聘した。元来は広島国際映画祭のゲストとしての来日だったが、さらに東京、京都でもイベントを企画し、全10作品の上映と質疑応答を行った。ネストラ作品が日本語字幕付きで上映される初めての機会でもある。ストローブ=ユイレと親交の深かった監督だけあり、ドキュメンタリー映画としても撮影対象との向き合い方の距離感や、ナレーションを多用し言葉の表現力と映像表現を対位的に扱う方法など興味深い手法が多く、ネストラ作品の考察をさらに掘り下げる重要性が認識された機会となった。今年度はその独自の映画スタイルについて論文化し発表する時間的余裕がなかったのだが、それは次年度以降の研究の中心課題の一つとしたい。

年度の終盤の3月には、シャーネレク監督を始めとする「新ベルリン派」と、ネストラ監督作について、それぞれ中間総括的な講演イベントを開催した。これらはどちらも次の研究に向けての構想を提示するものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

渋谷哲也、東西ドイツのニューシネマ 断絶と共通性と、カタログ「戦後ドイツの映画ポスター」、国立映画アーカイブ、査読無、2016年、66-69頁。

渋谷哲也、戦後ドイツ映画演劇における挑発の系譜、ファスビンダー、シュリンゲンズィーフから〈フェイク・ヒトラー〉へ、ドイツ研究52号、ドイツ学会、査読有、2018年、26

41 頁。

〔学会発表〕(計 7 件)

渋谷哲也、ファスピンダー、シュリンゲンズィーフ、フェイク=ヒトラー ドイツ・メディアにおけるタブー破りのいくつかの傾向、日本ドイツ学会、2017 年 6 月 4 日。

渋谷哲也、映画解説講義×3 回、立誠シネマで観る / 学ぶワールドシネマ：ドイツ篇 vol.2 ジャーマン・メロドラマの系譜 2016 年 4 月 22 24 日

渋谷哲也、映画解説講義×3 回 立誠シネマで観る / 学ぶワールドシネマ：ドイツ篇 vol.3 ファスピンダー、イントランス！ 2016 年 10 月 7 9 日 立誠シネマ

渋谷哲也、現代ドイツ映画入門篇、ニュージャーマンシネマ再考：クルーゲ篇、エスパスビプリオ文明講座、2018 年 1 月 20 日。

渋谷哲也、上映後ティーチイン、《ストローブ=ユイレ 回顧から新地平へ》、同志社大学寒梅館ハーディーホール、2018 年 5 月 8 日。

渋谷哲也、現代ドイツ映画入門篇、知られざる巨匠ネストラーとホロコースト、エスパスビプリオ文明講座 2019 年 3 月 9 日。

渋谷哲也、映画上映後の解説、21 世紀ドイツ映画の潮流：ベルリン派探訪、神戸映画資料館、2019 年 3 月 17 日

〔図書〕(計 1 件)

渋谷哲也 他、 森話社、ストローブ=ユイレ シネマの絶対に向けて、2018 年、384 頁

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者 なし

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。